様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　4　月　20　日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18791743
研究課題名（和文）　介護老人保健施設における看取りに対するケアスタッフおよび家族の揺らぎと満足度
研究課題名（英文）　Caring For The Dying At Geriatric Health Service Facility of The Elderly Requiring Care

研究代表者
小野　光美　（ONO MITSUMI）
島根大学・医学部・講師
研究者番号：20364052

研究成果の概要：
本研究は，介護老人保健施設（以下老健とする）における看取りに対する施設スタッフの揺らぎと満足度について明らかにすることを目的とした。１次調査として，実際に看取りを行っている老健の看護管理者，看護職者，介護職者を対象に質問紙調査を実施した（有効回収率は看護管理者48.9%，看護職者33.1%，介護職者25.5%）。２次調査は１次調査をもとに，22名（管理者4名，看護職者6名，介護職者12名）にインタビューを実施した。その結果，老健における看取りの現状と，管理者，看護職者，介護職者それぞれの揺らぎと満足感が明らかになった。高齢者医療，福祉，介護に関する制度の変遷の中，老健における看取りは喫緊の課題である。今後も丁寧に調査を続け，検討を重ねていく必要があると考える。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	700,000	0	700,000
2007 年度	1,200,000	0	1,200,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,400,000	150,000	2,550,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・地域･老年看護学
キーワード：介護老人保健施設，看取り，揺らぎ，満足度

１．研究開始当初の背景

介護老人保健施設は，在宅復帰に向けた中間施設である。しかし，平成15年介護サービス施設･事業所調査によると，家庭に戻る者の割合は39.2%，在所期間が1年以上の者の割合は20.1%，平均在所日数は230.1日となっており，中間施設としての役割が果たせなくなっている現状がある。

平成6年の老人保険制度改正によって，急速に老人保健施設の整備が行われてから10年が経った。当初からの施設利用者は10年の歳を重ね，人生の終焉を考える時間に入っていると言える。

平成15年度に看護協会が実施した「介護保険施設サービスにおける看護実態調査」では，入所者および家族が介護老人保健施設において終末を迎えることを希望した例が64.3％あり，看取りに対するニーズの高さを示す結果となった。これに対し，入所者および家族が施設において終末を迎えることを希望した場合の介護老人保健施設の対応は，「原則として応じる」が29.6％のみにとどまっていた。介護老人保健施設における看取りの意味を家族の視点から検討するため，実際に介護老人保健施設において看取りを終えた利用者の家族にインタビューを実施したところ，家族はその時々で揺れる思いを抱えながらも，長年利用してきた施設における人との関係や生活がこれまでの生活に《近い》状況であると感じていた。一方，施設スタッフもまた，長い年月を重ねて築いてきた利用者・家族との関係の中で，利用者の最期をこの場で迎えさせてあげたい，看取りたいという思いを抱いていると言える。しかしながら，医療設備の整わない施設の環境における看取りに対する様々な葛藤や困難が施設における看取りを躊躇させたり，実際に看取りを行なってからも，利用者や家族にとって本当に満足のいく最期を迎えることができたのかという思いを抱いているのではないかと推測できる。

したがって，介護老人保健施設における看取りに対する揺らぎと満足度について，施設スタッフと看取りを終えた利用者の家族の視点から検討が必要であると考えた。

２．研究の目的

本研究は，介護老人保健施設における看取りに対する揺らぎと満足度について，施設スタッフと看取りを終えた家族の両者の視点から明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

（１）＜2006年度＞１次調査：

質問紙調査により，実際に看取りを行っている介護老人保健施設の看護管理者および看護職者，介護職者が抱える葛藤や困難，看取りに対する満足度を明らかにする。

（２）＜2007・2008年度＞２次調査：

１次調査の結果を受けて，インタビューにより，実際に看取りを行っている介護老人保健施設の看護管理者および看護職者，介護職者が抱える葛藤や困難，看取りに対する満足度についてさらに検討を重ねる。

３次調査：質問紙調査により，介護老人保健施設で看取りを終えた利用者の家族の思い（終の場所の決断理由，看取りの中での葛藤，看取りに対する満足度など）を明らかにする。

４．研究成果

（１）＜2006 年度＞1 次調査の結果：

1）分析対象：調査票の配布は総数1820部（看護管理者45，看護職者501，介護職者1274），回収数は525（回収率28.8％），分析対象は有効回答の513＜看護管理者22（有効回収率48.9％），看護職者166（有効回収率33.1%），介護職者325(有効回収率25.5%)＞とした。

2）看護管理者について：①看護管理者が捉えたスタッフの揺らぎや満足感：管理者からみて『老健の看取りについて看護職者は満足感を感じていると思う』と答えたのは16人(80.0%)，『介護職者』の場合は12人(60.0%)であった。また，『老健の看取りについて看護職者・介護職者は揺らぎを感じていると思う』がともに8割を占めた。『看取りの質』について，『高い・やや高いと思う』と答えたのは12人(54.5%)であった。②看取りへの看護管理者の思い:『老健での看取りに対する本人また

は家族の揺らぎを感じたことがある』管理者は13人(65.0%),『管理者自身が揺らぎを感じたことがある』のは7人(35.0%)であった。管理者自身の揺らぎへの対処として,「スタッフと話し合い，思いを共有した」「これでいいのだと自分を納得させた」という意見が多かった。看護管理者は老健における看取りを意味あるものと捉え，半数以上の者が看取りの質が高いと答えながら管理者自身も揺らぎを感じていた。管理者は揺らぎの対処法としてスタッフとの語り合いを挙げており，スタッフを支援するだけではなく管理者もまた支えられていることが窺えた。

3）看護職者および介護職者について：『老健で看取ること』に,『積極的・やや積極的』であると答えた看護職者は(53.4%)，介護職者(39.2%)で，看護職者の方が老健で看取ることに対し積極的な姿勢であった。家族へのかかわりにおいて，介護職者は看護職者に比して死にかかわるコミュニケーションや看取りの準備などに消極的な傾向であったが,『入所者と家族が一緒に過ごせる時間をつくる』については積極的な傾向であった。看護職・介護職者が捉えた入所者または家族の意思の揺らぎについては，看護職者の方が感じている傾向が強かった。『老健での看取りの質の評価』では，看護職者が介護職者に比して質が高いと答えていた。介護職者は，死に関するかかわりについて消極的であったが，入所者・家族に対し今このときを大切に過ごせるかかわりを行っていることが窺えた。

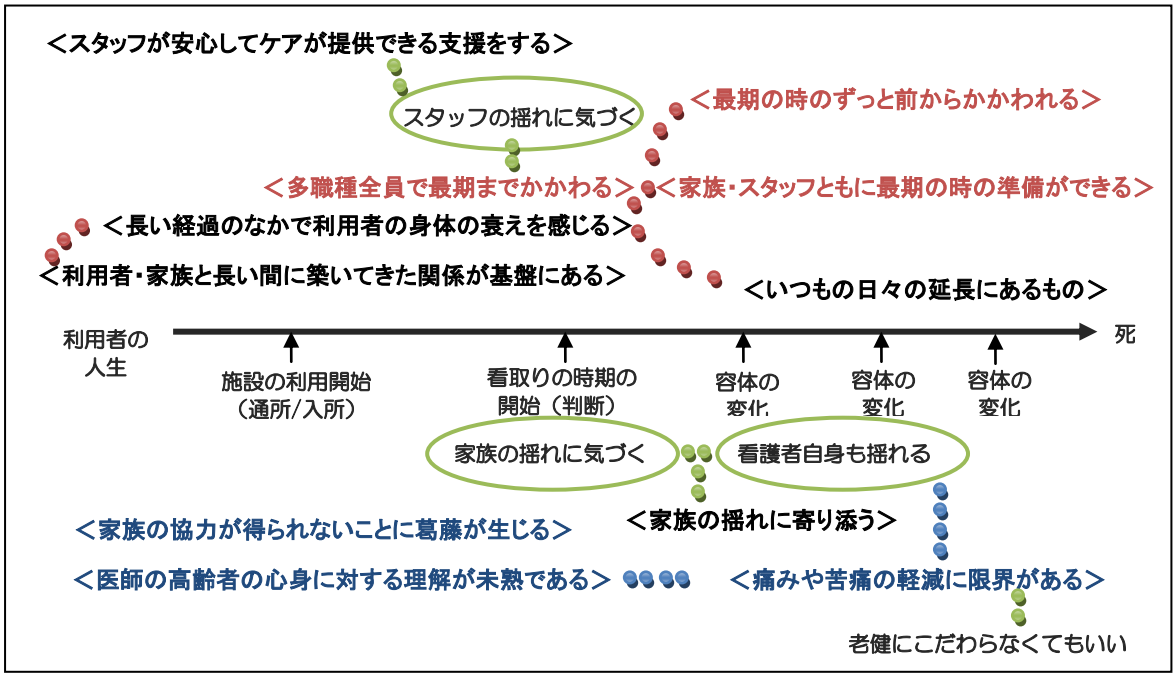
（２）＜2007・2008 年度＞2 次調査の結果：

1）研究協力者：協力者は 22 名で，管理者が 4 名，看護職者が 6 名（女性 6 名，平均年齢 34.8 歳＜29～46 歳＞，老健勤務平均年数 5.3 年)，介護職者が 12 名（女性 5 名，男性 7 名，平均年齢 34 歳＜26～57 歳＞，老健勤務平均年数 8.8 年）であった。

2）看護管理者：老健での看取りは，利用者が最期の時までをどのように生きるのかを利用者・家族とともに十分に考え，支援することができることを特徴と捉え，それは同時にスタッフの学びの機会になると考えていた。管理者は，利用者の状況や家族の揺れに添って様々な対応を丁寧に行っていた。また，医師を巻き込むこと，ケアの方針を一本化させること，スタッフの様々な揺らぎに対するフォローを行うことが管理者の責任と捉え実施していた。

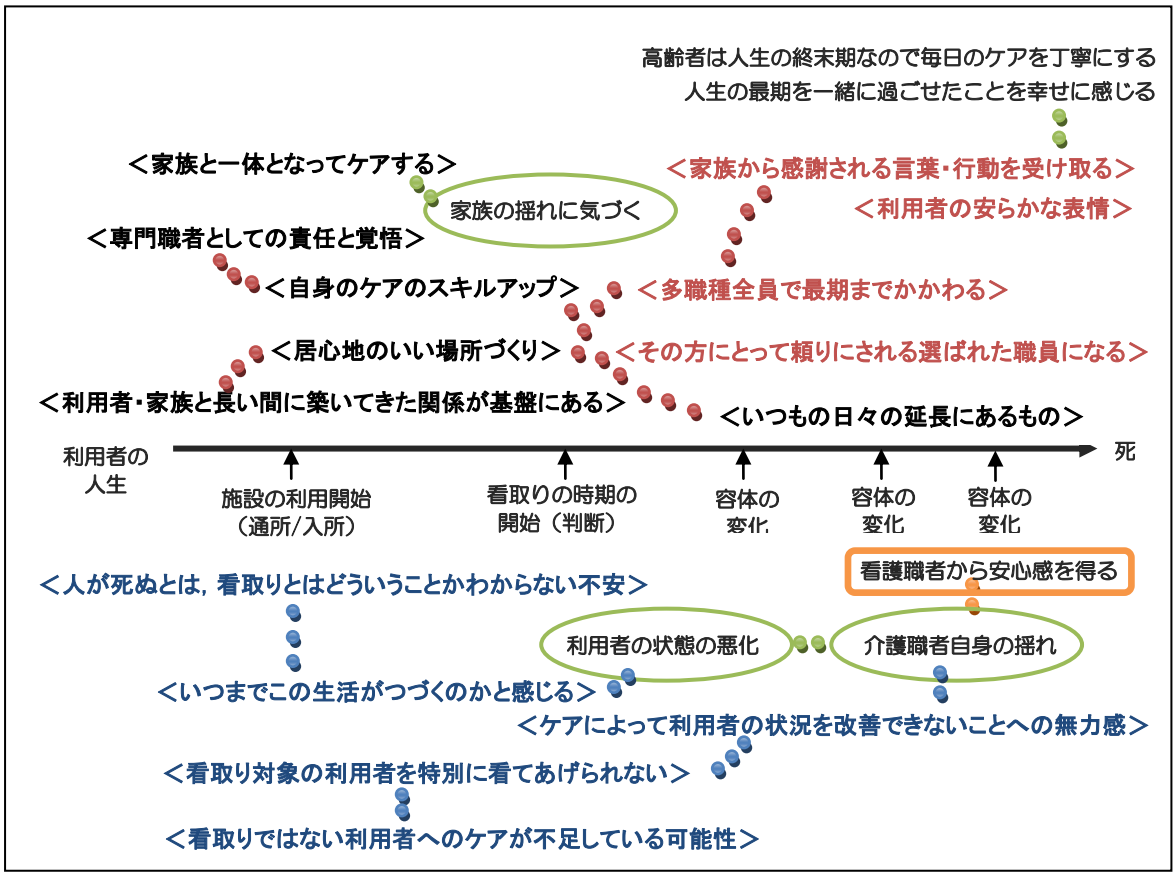
3）看護職者・介護職者：看護職者の揺らぎと満感については下記の図 1，介護職者の揺らぎと満足感については下記の図 2 に示すとおりである。

施設の状況に影響されることもあり，今後も丁寧に調査を重ねて検討していくこととする。



＊赤字は＜満足感＞，青字は＜揺らぎ＞を示す

図１．看護職者の揺らぎと満足感



＊赤字は＜満足感＞，青字は＜揺らぎ＞を示す

図２．介護職者の揺らぎと満足感

4）3 次調査について：現段階は研究の協力が得られた施設と研究者との関係をつくる段階であると判断し，本研究で予定していた家族に対する調査は行わなかった。今後，引き続き調査を行う中で必ず実施していく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 4 件）

①小野光美，原祥子，介護老人保健施設における看取りに対する看護職者の揺らぎと満足度，第 28 回日本看護科学学会学術集会，平成 20 年 12 月 13･14 日，福岡市.

②小野光美，原祥子，大畑政子，岩郷しのぶ，沼本教子，介護老人保健施設における看取りに対するケアスタッフの揺らぎと満足感，日本老年看護学会第 12 回学術集会，平成 19 年 11 月 10･11 日，神戸市.

③岩郷しのぶ，原祥子，小野光美，沼本教子，看護管理者がとらえた介護老人保健施設における看取り，第 11 回日本看護管理学会年次大会，平成 19 年 8 月 24･25 日，高知市.

④大畑政子，原祥子，小野光美，岩郷しのぶ，沼本教子，介護老人保健施設における看取りに対するかかわりと評価―看護職と介護職の比較，第 33 回日本看護研究学会学術集会，平成 19 年 7 月 28・29 日，盛岡市.

６．研究組織

(1)研究代表者

小野　光美（ONO MITSUMI）

島根大学・医学部・講師

研究者番号：20364052